



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第68回“社会を明るくする運動”作文コンテスト



認める心と信じる力



東京・清水 あみ

私がやっちゃんに初めて会ったのは三年前、病気で急死した父の葬儀の時だった。父の葬儀に来たやっちゃんは帰り際、母に「困った事があったら相談してよ。」と声をかけていった。疲れていたはずの母がその時だけは「あのやっちゃんが他人の心配をするようになるなんてね。」となぜか嬉しそうに微笑んだのでとても印象に残っている。やっちゃんってどんな人だったの？気になったがその時の私は父のことで頭がいっぱいですぐに忘れてしまった。やっちゃんの名前を再び耳にしたのはつい最近の祖母との会話だった。“社会を明るくする運動”についての作文を書くことを祖母に話したら、やっちゃんの話をしてくれたのだ。その時の祖母も三年前の母と同じ様になぜか嬉しそうに笑っていた。

やっちゃんは私と同じ年頃位から段々と生活が荒れてゆき、学校や街で非行を繰り返すようになってしまった。高校を中退した後、非行は益々エスカレートしていった。時には地方から東京に来て当時の仲間達と暴れて警察沙汰になった事もあるそうだ。地方にいるやっちゃんのお母さんの代理で祖母が警察まで迎えに行った事もあった。「札付きの悪」と言われていたのよ、と祖母が言っていた。

現在のやっちゃんは建築業の会社で三百人の社員とその家族の生活を支える経営者になっている。取引先からの信頼が厚く、社員の面倒見も良いと評判で、毎日忙しく働いているという。葬儀の時に母が後ろ姿に微笑んだやっちゃんしか知らない私には昔の姿なんて想像すら出来ないほどだ。荒れた生活から抜け出すのは私が思っている以上に大変だったに違いない。周囲の冷たい目がそこにはあり、その逆に周りには一緒に非行を繰

り返すいつもの仲間がいる。何年もかけて陥ってしまった「札付きの悪」の日常は、そこから立ち直る必要があることさえ自覚させなかったのではないか。

「やっちゃんが変わったきっかけはなんだったの？」と祖母に聞くと、祖母は「やっぱり大切な人との出会いだね。」と答えた。やっちゃんに守るべき家族が出来た時、やっちゃんは家族を養い、生活を守るため今までの仲間の大半と縁を切った。そして、初めて建築業の仕事に就き、働き始めた。奥さんは毎日そんなやっちゃんがくじけぬ様に励ましの言葉をかけ続け、経済的な苦勞をかけたくなかったやっちゃんは、死に物狂いで働いた。その姿を会社の社長さんが見て、仕事ぶりを高く評価し、やっちゃん自身を認めてくれた。そして、重要な仕事も任せられ、自信にも繋がった。陰で自分を支えてくれる奥さんとの出会い、今の自分を高く評価し、認めてくれる社長との出会いが、現在のやっちゃんを作っていた。

祖母の話聞きながら私自身も誰かに認められたり、受け入れられていることが日々の生活の安らぎや力になっていたのだと気付いた。同時に、他人から遠ざけられたり、拒絶され続けたら、生きる希望も見いだせなくなってしまうのではないかとも思った。

罪を犯すのは決して許されないことだ。そこには被害者がいて、償っても償いきれない罪がある事を忘れてはいけない。罪を償い更生する努力をしても、過去の罪が分かれば周囲の視線は冷たく、生きにくい社会になってしまうだろう。犯した罪の代償は私の想像を超えているかもしれない。しかし、それだと心を入れ替えどんなに努力しても無駄なのだと、絶望感に襲われてしまう。自分の生きる価値を見失い、また罪を犯してしまう。私は非行や罪を犯してしまった人がこのサイクルから抜け出すには彼等自身だけの力ではとても難しいのではないかと考えた。やっちゃんに奥さんや社長さんがいたように、彼等を受け入れ、更生の道を辿る姿を見つめ続けてくれる誰かが必要なのだと思う。

私はどんな時にその誰かになれるのか、身近な事に置き換えて考えてみた。例えばいじめ。いじめる側にいる人もそれが良い事だと思っている人は少ないのではないか。もしかしたら、抜け出し方が分からずに苦しんでいるのかもしれない。いじめはいけないことだ。でも、もしやり直したい、抜け出したいと思っている人がいたら、私はその手助けが出来る様な人に

なりたいと思う。人の心を変えたり、救えるのも人なのだと今回強く感じる事が出来たからだ。

私は、罪を償い、心から更生したいと願う人にもう一度チャンスが与えられる社会であって欲しいと思う。なぜなら、やっちゃんが社員を信頼し、認める事で自分に自信を持ち、希望をもって生きられる人を社会に送り出しているからだ。私はどんなときでも相手を認め、心に寄り添い、必要とされたときに手助けができる人になりたいと思う。